【研究ノート】

トルコにおける「ふしぎな図書館」の出版事情
―翻訳者 Ali Volkan Erdemir 氏インタビューを中心に―

山根　由美恵
（山口大学　講師）

はじめに

本誌掲載の拙稿「イラストからみる「翻案」のダイバーシティ―村上春樹「ふしぎな図書館」（17カ国版）の比較を通して―」の調査において、*Tuhaf Kütüphane*（トルコ版「ふしぎな図書館」）の翻訳者・Ali Volkan Erdemir 氏（Erciyes Üniversitesi　教授）にメールインタビューする機会を得た。その際、村上翻訳に関する重要な情報を多く紹介いただき、村上研究に寄与するところが大と判断したため、研究ノートとして発表する。

記載情報は、筑波大学主催でおこなわれた講演関係資料（A：口頭発表原稿）。トルコ語のインタビュー（B：稿者が翻訳サイトで日本語に翻訳後、Erdemir 氏にメールで送り、大きな意味のズレはないことを確認してもらった内容）、メールインタビュー（C）である。

トルコの出版社：Doğan Kitap のサイト[1]によると、トルコでは下記のような村上作品の翻訳出版がなされている。（近年から遡る形で記載）

・*Bir Kediyi Terk Etmek*（『猫を棄てる』訳者 Ali Volkan Erdemir・2022）
・*Birinci Tekil Şahıs*（『一人称単数』訳者 Ali Volkan Erdemir・2021）
・*Sadece Müzik*（稿者訳 Only Music『小澤征爾さんと、音楽について話をする』訳者 Ali Volkan Erdemir・2021）
・*Pinball, 1973*（『1973 年のピンボール』訳者 Ali Volkan Erdemir・2020）
・*Dans Dans Dans*（『ダンス・ダンス・ダンス』訳者 Ali Volkan Erdemir・2020）
・*Mesleğim Yazarlık*（『職業としての小説家』訳者 Ali Volkan Erdemir・2019）
・*Doğum Günü Kızı*（『バースデイ・ガール』訳者 Ali Volkan Erdemir・2019）
・*Kumandanı Öldürmek*（『騎士団長殺し』訳者 Ali Volkan Erdemir・2018）
・*Rüzgarın Şarkısını Dinle*（『風の歌を聴け』訳者 Ali Volkan Erdemir・2018）
・*Fırın Saldırısı*（『パン屋を襲う』訳者 Ali Volkan Erdemir・2017）
・*Karanlıktan Sonra*（『アフターダーク』訳者 Ali Volkan Erdemir・2017）
・*Tuhaf Kütüphane*（『ふしぎな図書館』訳者 Ali Volkan Erdemir・2016）
・*Sputnik Sevgilim*（『スプートニクの恋人』訳者 Ali Volkan Erdemir・2016）
・*Kadınsız Erkekler*（『女のいない男たち』訳者 Ali Volkan Erdemir・2016）

[1] https://www.dogankitap.com.tr/yazar/haruki-murakami

・*1Q84*（三巻本１～３『1Q84』訳者 Hüseyin Can Erkin・2015）
・*Uyku*（『眠り』訳者 Hüseyin Can Erkin・2015）
・*Renksiz Tsukuru Tazaki'nin Hac Yılları*（『色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年』訳者 Hüseyin Can Erkin・2014）
・*Koşmasaydım Yazamazdım*（稿者訳：走らなければ書けない『走ることについて語るときに僕の語ること』訳者 Hüseyin Can Erkin・2013）
・*1Q84*（『1Q84』訳者 Hüseyin Can Erkin・2012）
・*Haşlanmış Harikalar Diyarı ve Dünyanın Sonu*（『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』訳者 Hüseyin Can Erkin・2011）
・*Sahilde Kafka*（『海辺のカフカ』訳者 Hüseyin Can Erkin・2009）
・*Yaban Koyununun İzinde*（『羊をめぐる冒険』訳者 Nihal Önol・2008）
・*Sınırın Güneyinde, Güneşin Batısında*（『国境の南、太陽の西』訳者 Pınar Polat・2007）
・*Zemberek kuşu'nun Güncesi*（『ねじまき鳥クロニクル』訳者 Nihal Önol・2005）
・*İmkânsızın Şarkısı*（稿者訳：不可能のバラード『ノルウェイの森』訳者 Nihal Önol・2004）

一見してわかるように、Erdemir 氏は 2016 年から現在まで 14 作の村上作品を翻訳しているトルコ語翻訳の第一人者である。トルコでは長編は完全に翻訳されている状況だが、短編集は近年のもの２冊（『一人称単数』『女のいない男たち』）と Kat Menschik 氏のシリーズ（『眠り』『パン屋を襲う』『ふしぎな図書館』『バースデイ・ガール』）に限られている。対して、エッセイは比較的多めの翻訳が進んでいるようである。

A　Ali Volkan Erdemir 氏講演（筑波大学主催）内容の紹介

2019 年 1 月 13 日、筑波大学が主催した国際シンポジウム「ポップ・テクストの力―日本文化の対話的発展に向けて」（於：東京国際交流館）において、Erdemir 氏は「『ふしぎな図書館』と不思議な関連性」という講演を行った。以下、講演内容（口頭発表用原稿）を記載するが、稿者の注記・解説（MS 明朝）と区別するために、講演内容をゴシック体で記す。また、ですます調はである調に変え、概略したところがある。

トルコにおける日本文学作品（三島由紀夫、川端康成、大江健三郎）は、日本語からではなく、フランス語訳からトルコ語に翻訳されてきた。それは、トルコでは 19 世紀から知識人や外交官の話す言語がフランス語だったことと連動している。1950 年代以降、英語が力を持つが、文学作品の翻訳は長い間フランス語からが多く、村上春樹作品のトルコ語訳も最近まで例外ではなかった。つまり、フランス語または英語訳を通じてトルコ語への翻訳が行われていた。

日本語から直接にトルコ語へ翻訳された初めての日本文学作品は夏目漱石『坊つちゃん』であるが、それは「日本におけるトルコ年」でもあった 2003 年でもあった。

「日本におけるトルコ年」とは、2000 年にトルコのジェム外相（当時）が来日した折に日本

政府に対して提案し、両国のジョイント・アクション・プランに盛り込まれたもので、2003 年 2 月から 2004 年 3 月までの期間、日本の各地で文化・観光・投資を三つの柱に、様々なイベントが開催された。[2]

翌年の 2004 年に村上春樹作品の最初のトルコ語訳『ノルウェイの森』が出版される。タイトルはフランス語のタイトル *La Ballade de l'impossible*（不可能のバラード）が使用された。2005 年の『ねじまき鳥クロニクル』と 2008 年『羊をめぐる冒険』の翻訳もフランス語から行われた。2007 年『国境の南、太陽の西』は英語からの翻訳である。

2009 年に日本語からトルコ語への翻訳が始まる。Huseyin Can Erkin 氏（アンカラ大学・日本語日本文学科教授）が、2009 年『海辺のカフカ』、2011 年『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、2012 年『1Q84』、2013 年『走ることについて語るときに僕の語ること』、2014 年『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』、2015 年『眠り』を翻訳した。

2015 年に、大江健三郎の三編の短編小説「飼育」、「われらの狂気を生き延びる道を教えよ」、「みずから我が涙をぬぐいたまう日」と村上春樹『女のいない男たち』を翻訳したが、大江健三郎の翻訳は非常に難しかったため、翻訳のペースを落とそうと考える。しかし、『スプートニクの恋人』を翻訳している間に、村上春樹文学の魅力を感じ、村上の作品の翻訳を精力的に進めた（上記『騎士団長殺し』『ダンス・ダンス・ダンス』をはじめとする 12 作）。翻訳の仕事は村上だけではなく 2017 年、三島由紀夫『金閣寺』(2017)『愛の乾き』(2019)、今村夏子『むらさきのスカートの女』(2021)、芥川龍之介『羅生門』(2022) などがある。

最初、翻訳は趣味と考えていたが、結果的に翻訳家として活動していくこととなった。2017 年に三島由紀夫『金閣寺』を翻訳してから、もう一切三島の翻訳はしないと思ったが、翻訳契約の中には、三島由紀夫の『愛の乾き』、『禁色』、大江健三郎の『水死』などがある（2019 年当時）。大学で教えることが好きだが、学科長として山ほどの書類の仕事、終わりのない会議など、死ぬほどつまらないと感じることも多々ある。そんな雰囲気のなかで、日本文学作品を翻訳することは、現在（2019 年当時）のわたしにとって唯一の楽しみである。そして、ほぼ毎日テロのニュース、難民の切ない状況、地球温暖化などの現実世界で生き延びるために、翻訳しているとも言える。ある意味では、それはテラピーになると言ってもいい。好きな俳人種田山頭火が詠んだ俳句、「どうしようもないわたしが歩いている」を借りて言えば、「どうしょうもないわたしがホンヤクをしている」。その中で、特に村上春樹作品は生きて行くために「不思議な力」を与えてくれる。

村上以前の日本文学がフランス語からの翻訳であったこと、2003 年の「日本におけるトルコ年」がトルコの翻訳事情を変え、日本語からの翻訳を促した点など、トルコの翻訳事情についての貴重な情報が述べられた講演である。Erdemir 氏は村上だけではなく、三島由紀夫・大江健三郎などの翻訳を行っているが、三島・大江の翻訳での困難さに比べ、村上の翻訳は楽しみつつ、

[2] 大曲祐子「国際化の潮流：「2003 年日本におけるトルコ年―新たな日土交流の時代の曙―」を迎えて」（『自治会国際化フォーラム』2003・8）digidepo_8665822_po_05.pdf (ndl.go.jp)

「テラピー」に近いものとなっているようである。

『ふしぎな図書館』は、「ぼく」という主人公が図書館の貸出しコーナーで、そのときまで見たことのない女性に探している本の名前を告げると、またそのときまで見たことのないところへ案内される。その部屋のドアを開くと、老人がいる。本から引用すると、

「オスマントルコ帝国の税金のあつめ方について知りたいんです」とぼくはいった。老人の目がきらりと光った。「なるほど、オスマントルコ帝国の税金のあつめかた、ですか。それは、ああ、なかなか興味ぶかい」

私が不思議だと思うのは、この「ぼく」という主人公が「オスマントルコ帝国の税金のあつめ方について知りたいんです」と言ったことではなく、老人が「ここにはちゃんと、オスマントルコ帝国の税金のあつめ方ついて書かれた本が何冊もある」と言ったことだ。しかも、その本の中には、『オスマン帝国の税金事情』、『オスマントルコ帝国の税金あつめ人の日記』、『オスマン帝国における税金払い運動とその弾圧』という、いかにも専門的な本が揃っている。そこは市立図書館なのか。まるでオスマン帝国関連の文献がそろっている大学図書館にいるようである。

ある本の中に、トルコやオスマン帝国の話が出てくると、どうしてもオリエンタリズムの可能性か、その影を探してしまう。『ふしぎな図書館』でもそれを考えさせる箇所が 4 つある。一つ目はオスマントルコ帝国の税金集めの本のことである。次に、佐々木マキさんが書いた絵である。トルコ帽（フェス）をかぶる口髭の人、イブン・アルムド・ハシュールという主人公の絵と、19 世紀にイスタンブールに短期間滞在して、『アジヤデ』を書いたピエール・ロチの絵は似ている。さらに、19 世末イスタンブールに来て、およそ 20 年間いろいろな活動をした山田寅次郎の雰囲気にも似ている。それに加えて、バザー、トロピカルなの動物たち。これらはまさにエキゾチックな雰囲気が出ている。確かにこの本ではイスタンブールと言及されているが、この絵で描かれている都市はイスタンブールとはかけ離れた想像上の描写だ。佐々木さんはおそらくオリンタリストの画家から影響を受けてこの絵の舞台を描いたのではないかと思う。山の後ろに流れている砂漠の感じ、木、そして家の形は、どう見てもアラビア半島の都市のイメージだろう。

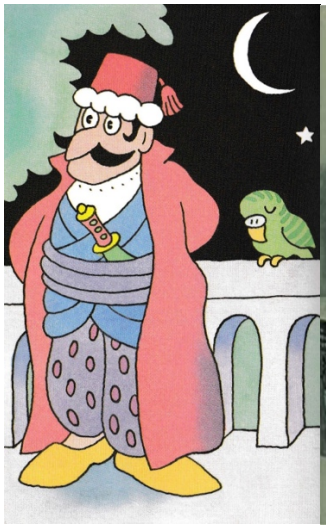
1952 年に山樵亭主人によって書かれた彼の伝記「新月山田寅次郎」では、彼のトルコでの生活に焦点が当てられている。オスマン帝国の旗にも３つの新月があって、今のトルコ共和国の旗にも新月と星がある。日本の旗に太陽があるのと同じようなシンボルだろう。

Erdemir 氏は「図書館奇譚」について、オリエンタリズムの視点を 4 点指摘している。このうち、山田寅次郎に関する指摘はとりわけ重要と考えられる。山田寅次郎の概歴は次のようになる。

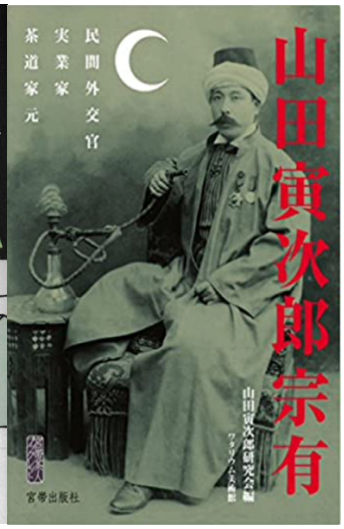
[3]山田寅次郎はトルコで最も有名な日本人と言われ、イスタンブールには山田寅次郎広場が存在する。山田がトルコと関わりを持ち始めたきっかけは、トルコの軍艦エルトゥールル号の遭難である。1890 年 9 月 16 日午後 9 時過ぎ、日土友好のための来日で帰途についていたエルトゥールル号は暴風雨の中、紀伊半島南端近くの大島の沖合で岩礁に激突。乗組員 650 名は全員海に投げ出され、587 名が死亡、生存者は 63 名であった。大島村民は村をあげて生存者の救出活動を行い、治療費など一切請求しなかった。新聞紙上でこの事件を知った山田は独自に遺族への義援金収集活動を行い、５千円（現在の価格では約１億円）を集めた。山田は義援金を送るため外務省に赴いたが、青木周蔵外務大臣から自身でトルコに赴き、直接渡すほうが良いとの提案を受け、トルコへ渡航する。トルコでは皇帝アブドゥル・ハミト２世に拝謁するが、皇帝は山田に日本とトルコの修好のためトルコで日本語を教えてほしいとの言葉をかけ、その後トルコに 22 年滞在することになる。山田はトルコで民間大使となり、日土両国の正式な外交関係樹立に尽力した。

Erdemir 氏の指摘の通り、佐々木マキのイラスト（図１）[4]は、山田寅次郎の風貌（図２）[5]と類似している。

（図１）



（図２）



イラストに描かれたイブン＝アルムド＝ハシュールのイメージに日土の友好関係に尽力した山田の形象が加わるとすれば、徴税吏であるハシュールは極悪非道な人物としてイメージ化されていないと言えよう。拙稿[6]で述べたが、村上は高校時代に中央公論社の「世界の歴史」シリーズを読み込んでおり、世界の歴史に深い興味を抱いていた。「図書館奇譚」がヨーロッパ寄りではなくトルコ側の目線がある点、同年に書かれた「羊をめぐる冒険」におけるアイヌ青年が中央権力を批判する眼差しを有していたことを鑑みると、ヨーロッパ

[3] 山田寅次郎については、長場紘「山田寅次郎の軌跡―日本・トルコ関係史の一側面―」（『上智大学アジア文化研究所』1996）、NPO 法人国際留学生協会の WebSite：http://www.ifsa.jp/index.php?Gyamadatorajirou を参照した。
[4] 『ふしぎな図書館』（講談社・2005、p61）
[5] 『山田寅次郎宗有　民間外交官・実業家・茶道家元』（宮帯出版社・2016、表紙）
[6] 山根由美恵「村上春樹「図書館奇譚」論―オスマン帝国／図書館／ボルヘス―」（『近代文学試論』2022）

文化のみを重視するのではなく、400 年間覇権を握っていたオスマン帝国の文化や歴史的影響力に対する意識があったことが読み取れる。その意味で山田寅次郎と似たハシュールの形象は、オスマン帝国に対するネガティブなだけではない印象を付加する面があると考えられる。なお、拙稿[7]で稿者は「図書館奇譚」とオスマン帝国の関係について考察したが、オリエンタリズムの点は考察が及ばなかった。著書収録の際に加筆を行いたい。

では、『ふしぎな図書館』に出てくる「新月」は、トルコを意味するのだろうか。

17 章で「ぼく」という主人公は、『オスマントルコ帝国の税金あつめの日記』を読んでいるうちにイブン・アルムド・ハシュールに変わる。昼は、イスタンブールの通りを歩き回って税金を集め、夕方は家に帰って、インコに餌をあげる。そして、寝室では三人の妻のうちの一人である美少女が彼を待っている。その女性は、図書館で彼にご飯を持って来てくれる女性で、二人の間に次のような会話がある。「〈良い月です〉と少女はくりかえした。〈新月が私たちの運命をかえてくれます〉／「そうなるといいね」とぼくは言った。」ここでは、新月は肯定的な意味を持っているのではないかと思われる。

新月の話が出る次のシーンは 19 章にある「少女は静かにベッドの上に腰を下ろした。彼女はずいぶん疲れているみたいに見えた。顔色がいつもより薄く、うっすらとすけてむこうの壁が見えるくらいだった。／〈新月が私たちのまわりからいろんなものをうばっていくの〉／「ぼくは目が少しちくちくするくらいだけど」」。ここでは、新月が否定的なイメージを持っている。

この 2 つの例から考えれば、新月は確かにオスマン帝国を思い出させるものかもしれないが、『ふしぎな図書館』では、単に何かが変わるときを表す時間を意味していると思われる。

19 世紀のヨーロッパで、トルコ人男性がハレムを持って、何人かの女性と結婚していると思われたのはオリエンタリズムの影響だろう。同じく、当時のトルコでは、西洋人、特にフランス人が妻の以外に妾と関係を持っていると思われていた。

オスマン帝国にハレムが入ったのは、1453 年のコンスタンチノープルの征服からである。トルコ女性が、社会から離れ、スカーフを身につける率がたかくなったのもこの時からである。宮殿のハレムが法律上なくなったのは 1909 年である。そして、オスマン帝国の最後に近い 1885 年にイスタンブールで行われた調査によると、二人以上の妻を持っている男性は 2.5%であった。『ふしぎな図書館』のイブン・アルムド・ハシュールという想像の人もおそらくこの 2.5%の中に入っているのだろう。

言いたかったことをまとめると、『ふしぎな図書館』とオスマン帝国またはトルコの関係は「ふしぎ」で、面白くて、楽しい。

村上春樹の『雨天炎天』は、ギリシャとトルコの旅行について書いた本である。両国にも足を運んで周った村上さんが『ふしぎな図書館』で、もしオスマントルコ帝国の代わりに、ギリシャとアテネを舞台にしたとして、読者に伝えたいことは変わらないと思われる。彼の最新作品『騎士団長殺し』で、メンシキという主人公は刑務所に入ったとき、そこに我慢するために、

[7] 注 6 に同じ。

スペイン語、トルコ語と中国語を学ぶ。それらは、イタリア語、ギリシャ語、韓国語であれば、何が変わるだろうか。最後に、『パン屋襲撃』で、マクドナルドの代わりに、バーガーキング、またはケンタッキー・フライド・チキンであっても、何も変わらないのではないかと思われる。

わたしは『ふしぎな図書館』で次の文章を読んで、この絵を見て、不思議な力を感じます。「母もいない。むくどりもいない。羊男もいない。少女もいない……一人ぼっちでいると、ぼくのまわりのやみはとても深い。まるで新月の夜みたいに。」人生は、どれほど暗くても、いい文章を読むことで、それを翻訳することで、その文章をそのまま頭に描くようないい絵をみたら、心の中に新月のような弱くても、小さくても、生き延びる力となる光が出ているのである。

Erdemir 氏は月とオスマン帝国との関係は希薄であると捉えているようだが、稿者は始祖オスマン一世とエデ・バリとの挿話に着目している。[8]オスマン一世は月が自らの体に入る夢を見たとエデ・バリに告げ、それが世界の覇権を握る予知夢であると判断したエデ・バリはオスマン一世を支え、帝国が誕生するという概要であり、月は覇権と関わる力の象徴といえる。「図書館奇譚」「ふしぎな図書館」において、新月（月が見えない状態）では地下の住人たち（老人・美少女）は本来の力を出せない。月が能力を左右するというところは、オスマン帝国やトルコ文化を意識したものであると考えられる。

また、オスマン帝国がギリシャ・アテネの舞台に変わっても読者に伝えたいことは変わらないといった発言は、テクストの地理的設定に意味があると考える立場であるので、それぞれ分析をしたあとで再考したい。同様に、マクドナルドの代わりにケンタッキーなどが互換可能であるのかは、慎重に検討すべきであると感じた。

B　Erdemir 氏による Kat Menschik 氏へのインタビュー

Erdemir 氏は Kat Menschik 氏にインタビューを試みており、2019 年 5 月 16 日付けの Web 記事が公開されている。[9]　以下、その内容を一部紹介する（インタビュー内容はゴシック体で、稿者の補足は明朝体で記す）。Erdemir 氏の記述や発言は冒頭に E、Menschik 氏の発言は冒頭に M と記した。

E：村上作品のイラストを描くのはどんな気持ちですか？

M：まず、私にとっては名誉なことです。次に、私の絵を喜んでくれることがとても嬉しいです。私は作家の作品を愛しているからこそ、イラストを描くことができるのです。夢のような、超リアルな、そして毎回異なる平面上にある、私が最も描きたい方法で書いているのです。だから、彼の物語の神秘的な側面を強調するアートコラージュとしてドローイングをするのが

[8] 注 6 に同じ。
[9] https://t24.com.tr/k24/yazi/murakamik-bag,2293

好きなんです。

E：特に今月トルコで出版された『バースデイ・ガール』の登場人物は、どのように描いているのでしょうか。

M：キャラクターは、主に絵を描いているときに現れます。でも、基本的に私と出版社で決めたのは、登場人物はすべて西洋風であること。誕生日の女の子は、若くて美しいけれども、はっきりしない感じであることです。彼女を見ていると、読者はこれから長い人生を歩むことを実感するはずです。

E：それぞれの物語で、基本的な 2 色を選ばれています。これらの色はどのように決められるのですか？　また、なぜ今回、赤をメインカラーに選ばれたのですか？

M：一冊一冊に形があり、それに合った基本的なアイデアを探すようにしています。一冊一冊、物語全体を貫くアイデアを探しています。そのため、例えば絵は枠に収めるのか、ページの終わりまで続くのか、一冊ごとに違う形を考えています。ドローイングに色をつけるべきか、ドローイングに文字を入れるべきか、入れないべきか。私の「線」、つまり描き方はいつも変わりません。そのため、私の本の外形は、他の本と区別できるようなユニークなものでなければなりません。『眠り』では、夜と同じようにミッドナイトブルーとシルバーを使うのが最も合理的な選択だと思ったのです。『パン屋を襲う』は村上春樹のシリーズなので、ダークグリーンとブロンズということで、そのように判断しました。

『バースデイ・ガール』では、自分でもびっくりするくらい、赤、ピンク、オレンジの 3 色を使っています。このキラキラした色が大好きです。20 歳の誕生日を迎える女の子をとてもよく映し出していると思います。

Menschik 氏の一連のシリーズは基本的に２色で構成されており、それぞれの作品に応じて色が選ばれている。『波』のインタビューにおいても、『ねむり』に関して「読み終えて、まず私の頭に浮かんだのは、青と銀色の二色刷りのイメージ。青は深い夜の色で、とても高貴な色でもあります。偶然にも担当編集者も全く同じイメージを抱いたそうで、基本コンセプトは固まりました。」と語っており[10]、村上の短編にイラストを付したこのシリーズは基本の二色を中心にした世界観が描かれている。

また、出版社との協議の上で「西洋風」を基本としているところは、拙稿で示したように、[11]アメリカ版 Chip・Kidd の方向性（オリエンタリズム）やフランスの HARUKI MURAKAMI 9STORIES

[10] カット・メンシック「ムラカミの重層を描くということ―村上春樹／カット・メンシック画『図書館奇譚』」（『波』2014・12、p10）
[11] 山根由美恵「イラストからみる「翻案」のダイバーシティ―村上春樹「ふしぎな図書館」（17 カ国版）の比較を通して―」（『村上春樹とアダプテーション研究』2023・1）

（Jc ドゥヴニ翻案・PMGL 漫画）のバンドデシネにおける、日本人表象との差がある。「夢のような、超リアルな、そして毎回異なる平面上にある、私が最も描きたい方法で書いているのです」（原文：“Ama Murakami’nin öyküleri beni hep buluyor; her zaman en çok çizmek istediğim şekilde yazıyor buluyorum onu: düşsel, hiper gerçekçi ve her seferinde başka bir düzlemde.”）という発言は、Menschik 氏が村上の非現実設定の世界観に魅力を感じており、それが現れた短編を絵本化していることが窺える。また、Menschik 氏も Erdemir 氏も村上文学をオリエンタリズムの眼差しで捉えるのではなく、自らに近接化（ジュネット）したうえで共感している姿があり、それが西洋風の「翻案」化と呼応している。

C　メールインタビュー

稿者は 2022 年 10 月に *Tuhaf Kütüphane*（トルコ版「ふしぎな図書館」）に関する メールインタビューを行った（10 月 11 日、10 月 13 日）。そこで得られた回答を以下に掲載する。

１：トルコ版「ふしぎな図書館」は、ドイツ語からの翻訳なのか、日本語からの翻訳なのか。
→日本語からの翻訳です。

２：「ふしぎな図書館」を翻訳した際に、難しいと感じたところがあれば教えて下さい
→２番目の質問ですが、日本語として特に難しいところはありませんでしたが、やはり「脳みそ」という言葉に違和感を感じました。それは、外国人として「みそ」というと、頭に思い浮かべるのはお味噌汁／Miso Soup だからです。

そして、女の主人公が話すとき、口は動きません。相手はそれを頭の中で聞きます。そこで、＜＞は使われます。「」と『』の区別はなんとなくしますけれども、＜＞は初めて見ました。トルコ語にそのまま移しました。

内容のことですが、６年前に翻訳したもので、詳細は忘れましたし、それに村上春樹に言えることではありませんが、オスマン帝国は土地・国を征服というか、奪うというか、それをした後は、その国の人は宗教と言語を自由にしました。しかし、重い税金の義務がありました。図書館で本を読んで脳が大きくなるか、栄養をたくさん持つようになるか、変わりますね。そして、その怖い老人ですが、脳みそを飲んで脳を食べます。植民地主義の影みたいなものを感じじゃないと思います。重い税金も脳みそを飲まされるのも、物を奪われることでしょう。

そして、2019 年東京で村上春樹に関する所を訪問した時、なかむらくにおさん（名詞にも『村上春樹語辞典』にもお名前は平仮名です）と少し会話するチャンスがありました。そのふしぎな図書館の長い階段で降りるところは、トルコのカッパドキアから連想されたじゃないかと言いました。

うちの大学から一時間のところで度々言っていますが、そうかなと思いました。よかったら、こちらをご覧ください。

https://ja.wikipedia.org/wiki/カッパドキア

３：トルコ版「ふしぎな図書館」の翻訳企画は、出版社からなのか、エルデミール先生の企画なのですか。

→今回は、出版社からでした。こちらの３回目の翻訳でした。それから、こちらの提案で翻訳された本の中には、『職業としての小説家』（トルコ語訳 2019 年）そして『小澤征爾さんと、音楽について話をする』（トルコ語訳 2021 年）などがあります。

４：日本版「ふしぎな図書館」（佐々木マキ）のイラストで出版する計画はなかったのですか。

→ありませんでした。当時、出版社はその本の存在を知らなかったと思います。「ふしぎな図書館」の場合は、Kat Menshick のイラストが人気を集めた時で、よく知られているため、出版社はそれを利用したと思います。（ところで、こちらからぜひ翻訳したいと出版社に勧めた、でも、村上春樹は翻訳を許さなかったと言われた、２冊があります。『ふわふわ』、そして、『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』です。）

Tuhaf Kütüphane：トルコ版「ふしぎな図書館」（Doğan Kitap・2016）は、日本語からの翻訳であり、企画は出版社：Doğan Kitap から持ち込まれた。[12] 「みそ」という言葉に Erdemir 氏は違和感を覚えている。稿者の感覚では、子供向けの絵本で脳みそという言葉を使用されるのには違和感がなかったため、民族・文化の差を感じた。なお、トルコ版では「beynimi」という語が使用されており、「私の脳」という意味である。（原文：“Yoksa o yaşlı adam mı yiyecek beynimi?”[13]：稿者訳：それとも、あの老人は私の脳みそを食べるつもりなのか。）日本語版「ふしぎな図書館」は「ひょっとして、あのおじいさんがぼくの脳みそを吸うんですか」[14]となっている。

また、鉤括弧の使用の差も、Erdemir 氏には新鮮だったようである。一重括弧（「」）で記すと直接的な対話になるが、山括弧（〈〉）にすることでテレパシーのような発言を示すという表記は、日本文学ではそれほど珍しくない。なお、トルコ版の美少女の発言も、日本語版と同様に山括弧（〈〉）が使用されている。他国と比較してみると、ドイツ版：斜体、チェコ版：斜体、フランス版：斜体、イスラエル版：斜体、スペイン版：二重山括弧（《》）、中国版：丸括弧（()）、台湾版：山括弧（〈〉）、韓国版：一重引用符（‘’：僕の発言は二重引用符）、アメリカ版：色の変化（美少女の発言：水色、他：黒）、ラトビア版・イラン版：色の変化（アメリカ版踏襲）、ハンガリー版：斜体、イギリス版：二重山括弧（《》）、イタリア版：二重山括弧（《》）、デンマーク版：山括弧（〈〉）となっている。各国でそれぞれの国に応じた表記の変化を付けており、美少女が言葉ではなく、テレパシーで話していることを強調していることが窺える。

---

[12] https://www.dogankitap.com.tr/yazar/haruki-murakami
[13] *Tuhaf Kütüphane*（Doğan Kitap・2016、p24）
[14] 『ふしぎな図書館』（講談社・2005、p34）

トルコでは Menschik 氏の一連のシリーズが人気であったため、日本版の「ふしぎな図書館」は候補に入らなかったようである。これは他のヨーロッパ圏でも同様ではないかと予想される。

『ふわふわ』と『村上春樹、河合隼雄に会いにゆく』が日本側の許可を得られなかった点も興味深い。稿者は『ふわふわ』は童話の中でもインパクトが薄い作であるように思われるため、翻訳許可を出さなかったのではないかと推測する。『村上春樹、河合隼雄に会いにゆく』に関しては、『職業としての小説家』や『小澤征爾さんと、音楽について話をする』と比べて赤裸々な発言が多いので、作家イメージを守る戦略であるように感じた。

＊電子メールによる複数回のインタビューや貴重な資料をご教示いただいた Ali Volkan Erdemir 氏に改めて感謝申し上げる。本稿は科学研究費補助金（研究課題番号 22K00320）による成果の一部である。